



【ピケティ「21世紀の資本」とグローバル・タックスシンポジウム資料】

「超バブル経済と資本主義の終焉」
 ～21世紀「相続の黄金時代」をいかに防ぐか～

2015年11月7日
 日本大学国際関係学部 教授
 水野和夫

1



①ゼロ金利政策と10年国債利回り2.0%割れ

- ・ 1997年9月以降、日本の10年国債利回り、2.0%割れ
- ・ 2011年11月以降、ドイツ10年国債、2.0%割れ
- ・ →「過剰・飽満・過多」(スーザン・ソントグ)

②「社会秩序それ自体が本質的に蒐集的」

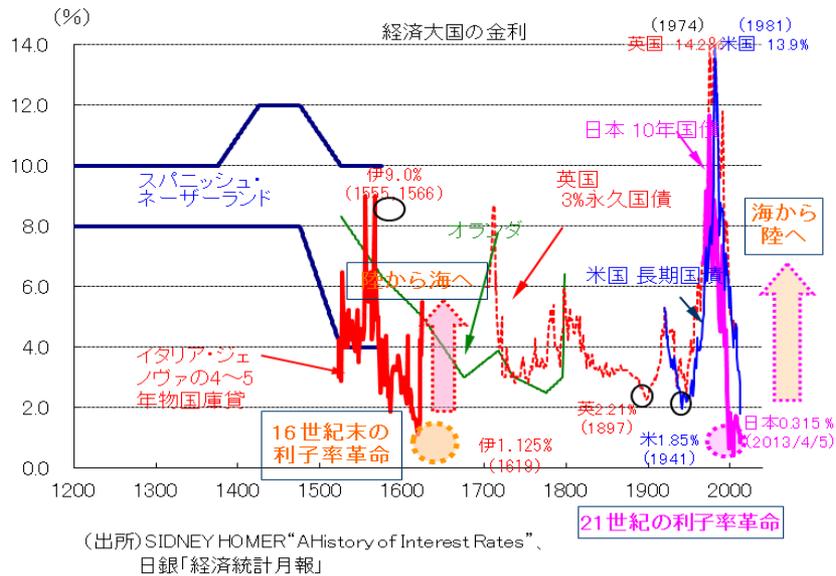
- ・ …フォルクスワーゲンと東芝事件
- ・ →付加価値(=売上-仕入)の成長の困難さ
- ・ →不正を侵さないと資本(利潤)の蒐集ができない
- ・ →秩序の崩壊

③1602年以来の株式会社の時代の終わり
 (『不確実性の時代』1977年、ガルブレイズ)

- ・ 「いまでも株主を代表する者はいない。株主も時代遅れなのです。何の機能も果たしていないそのような株主には債券で支払って縁を切り、配当や資本売却益を公共のものとする」
- ・ トヨタ、新型株式(債券と株式の一体化)

2

利率2.0%割れの意味・・・投資機会の消滅、より近くへ、中央から地方の時代へ



3

「歴史の危機」における新しいシステム構築

1. 過去40数年間、経済パフォーマンスの悪化
—「3年に一度バブルが生成と崩壊」(サマーズ元財務官)→所得の減少と貧困化・無産階級化、
2. ゼロ金利と「新中世主義」(ヘドリー・ブル、1977)
—ゼロ金利: 国債の出資証券化と株式の債券化
→オランダ東インド会社以前の世界へ
3. どうすべきか(近代システムを超えて)
—「より速く、より遠くへ、より合理的に」⇒「よりゆっくり、より近くに、より寛容に」

4

失われた近代

・・・「貨幣は種子から石へ」 (=ゼロ金利)

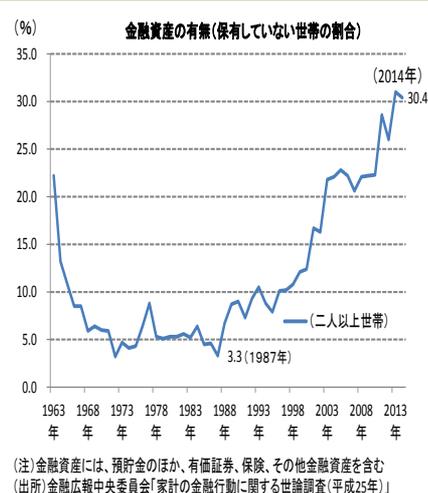
1. 西欧史とは蒐集の歴史・・・ゼロ金利とは蒐集の終り
 - ・ 「社会秩序それ自身が蒐集的である」(ジョン・エルスナー&ロジャー・カーディナル)
 - ・ ノアがコレクターの第一号(ノアの大洪水、紀元前2348年)
2. 動力革命がもたらした成長の時代・・・蒸気とは「結合」である
 - ・ 1人当たり生活水準と一人当たりエネルギー消費量・・・正の相関、18世紀で屈折(L字型)
3. 13世紀の「資本論」・・・資本とは「石ではなく種子である」
 - ・ 「貨幣不妊説」を克服→貨幣の種子的性格を容認、資本主義は1215年から始まった
 - ・ オリーヴィ『契約論』、「我々はこの性格を通常「資本」capitaleと呼んでいるが、**この種子的性格ゆえに**[返還に際しては]単にその貨幣ないものの価値だけでなく、**余分の価値を返還**しなければならないのである」(大黒『嘘と食欲』、52頁)

5

グローバリゼーション・・・「周辺」の組換え →減少する賃金と増加する日本の無産階級

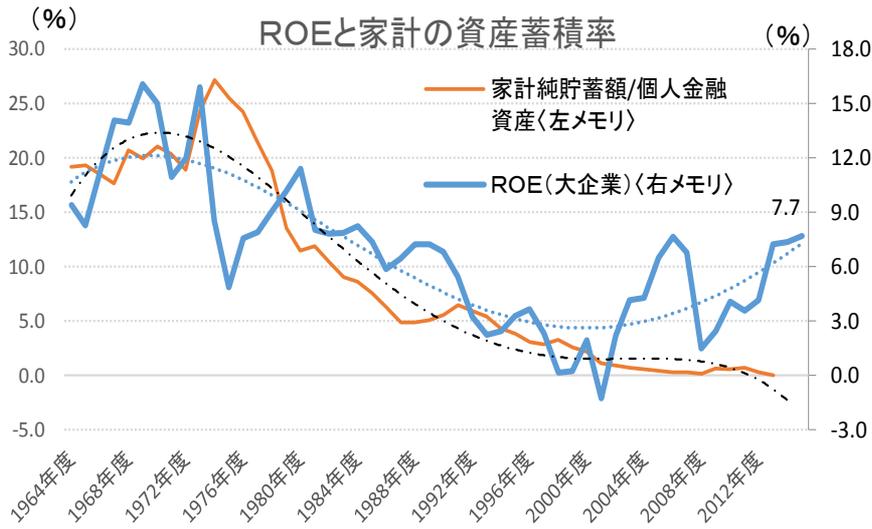
成長戦略下で低下する実質賃金

崩壊する中産階級



6

資本の帝国・・・所得からの資産形成は不可能



(出所) 財務省「法人企業統計年報」、日本銀行「資金循環勘定」

7

「極端な20世紀」(E・ホブズボウム)

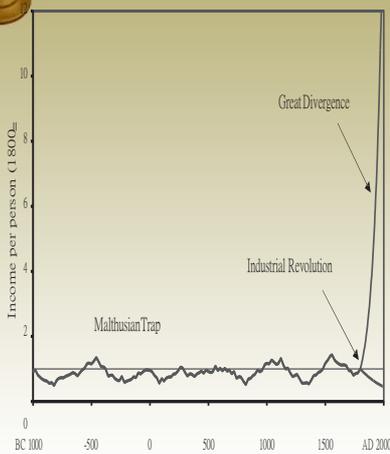
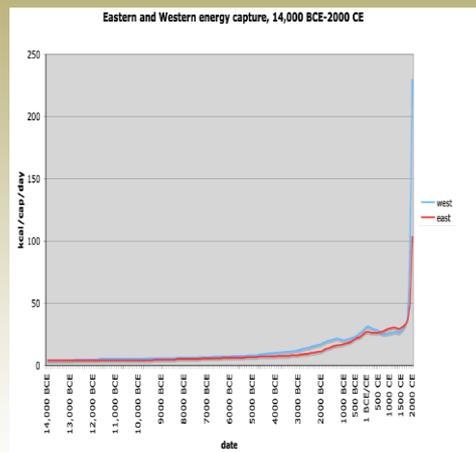


Figure 1. World economic history in one picture. Incomes rose sharply in many countries after 1800 but declined in others.



Graph 1. Eastern and Western energy capture, 14,000 BCE-2000 CE

8